

新刊のご案内

本書『風神雷神はなぜ笑っているのか』(2014年11月発行予定)は、対話による美術鑑賞の実践と研究に長年取り組み、教育現場への普及に尽力してきた上野行一先生(帝京科学大学教授)の、『私の中の自由な美術』に続く新刊です。

第1部では、対話による美術鑑賞について、美術館と学校教育の立場の違いを踏まえ、その理念と定義、日本における受容史をひも解いています。また、対話による美術鑑賞を巡る誤解について、学びのための鑑賞という視点から解きほぐし、セオリーを逸脱した自己流に警鐘を鳴らします。

第2部では、学校での対話による美術鑑賞の授業実践を、論理とルール、事例とともに紹介しています。学習課題と資質・能力の設定や作品選定の基準、評価と改善などについても深く踏み込んでいます。

本書は対話による美術鑑賞の、日本における決定版ともいえるでしょう。ぜひ『私の中の自由な美術』とあわせてお読みいただき、授業にお役立ていただければと思います。



『**風神雷神はなぜ笑っているのか**』
完全講座
上野行一著 光村図書出版
本体2,500円＋税



左／作品に対するつぶやきのような生徒の言葉から、本書は始まる。
右／コミックも部分的に組み込んだ「2章 授業の進め方」。

美術準備室 No.6

2014(平成26)年10月31日

発行人 ■ 常田 寛
発行所 ■ 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話：03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp
デザイン ■ Better Days(大久保裕文+小倉亜希子)
印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社



特集

身近な対象から
主題を生む

アトリエ訪問

日本画家 千住 博



作家の肖像

建築家 丹下健三

放課後ART

- 石川県能美市立根上中学校
- 金沢21世紀美術館

この1点

「富嶽三十六景
神奈川冲浪裏」
福岡伸一

ア ト リ エ
訪 問

第 6 回

千住 博

日本画家

霧のような飛沫^{しぶき}を上げ、激しく流れ落ちる滝を
キャンバスいっぱいに描いた「ウォーターフォール」。
この作品で、一躍その名を世界に知らしめた千住博は、
拠点をニューヨークへ移し、制作活動が続けている。
今回は、発電所だった場所を改装したという、
その巨大なアトリエに伺った。

撮影 常盤武彦

「ニューヨークなら、すべてのボーダーを超えて、自由に絵が描けると思いました。」

マンハッタンから北へ列車で約50分。木々に囲まれた閑静な駅の近くに「千住スタジオ」はある。外観はどっしりとしたレンガ造りで、まるで何かの工場のような。[SENJU STUDIO NY]と書かれたドアの脇にあるブザーを押すと、扉がガチャリと開き、真っ白な壁に囲まれた巨大な空間が目飛び込んできた。

—— 広くて、とても開放的なアトリエですね。

千住 以前はマンハッタンの中心部にアトリエを構えていたのですが、作品が巨大化して入りきらなくなってしまって。それで、ここに引っ越してきました。

この建物は昔、発電所として使われていたそうです。最初に訪れたときは、長い間使われていなくて、幽霊が出そうな不気味な空間でした（笑）。その巨大な廃屋をアトリエに改装しようと、建築家に何度も相談して、大工事を行いました。その



古い外観からは想像もつかないが、内部には明るく広々とした空間が広がっている。

かいあって、広くて明るい、理想的な空間ができたと思っています。

アトリエは、常にクリーンな状態にしておくように心がけています。頭の中が混沌としていますから、制作環境は整理しておきたい。また、毎日欠かさず、花を飾るようにしています。空間の中に生きたものがあるのは、すてきなことだと思うので。

普段は、朝6時にアトリエに入り、夜8時頃までずっといます。アトリエにすることが、画家の才能の一つだと、僕は思うんですよ。常にここにいれば、何かをひらめいたときに、すぐに形にできるでしょう。写真家がシャッターチャンスを見逃さないために、毎日カメラを持ち歩いているのと同じ。たとえ制作に行き詰まって苦しい状態でも、いつもアトリエにるようにしています。

—— ニューヨークに来て20年になるそうですね。なぜ、制作の拠点を日本から移されたのですか。

千住 僕が学生だった頃はインターネットがなかったので、海外の情報を得たり、日本から海外へ情報を発信したりすることがとても難しかった。だから、自分が情報の発信地に出ていくしかないと思い、学生時代から何度もニューヨークを訪れていました。



ニューヨークは、さまざまな国籍、宗教、思想によって成立している多様性に満ちた街です。ここならすべてのボーダーを超えて、自由に絵を描くことができると思いました。そして30代のとき、家族を連れて移り住むことを決断したんです。迷いはなかった。ニューヨークに骨を埋めるぐらいの覚悟がないと、何も実らないと思いましたから。

—— 海外で日本画を制作されているのが、興味深いなと思いました。

千住 日本画だから日本で描かなければならないということはないと思うんです。日本画は、本来もっと自由なものですから。

僕は滝を描くときに、エアブラシを使って岩絵の具を吹き付けるのですが、それを「日本画なのに邪道だ」と感じる人もいます。でも、歴史を見てみると、^{おがたこうりん}尾形光琳や^{はさがわとうはく}長谷川等伯らは、まったく常識にとらわれない発想で絵を描いている。日本画はもっと自由な発想で考えていくべきなんじゃないでしょうか。

そもそも芸術は、何ものからも自由でなければならない。そう考えると、多様性に満ちたニューヨークは、芸術家にとって最適の街といえるでしょう。僕は制作の場としてこの地を選び、これからもここで日本画を描き続けていくつもりです。



道具は整理整頓して収納。「どこに何があるのか」がひと目でわかるように」を心がけている。



アトリエの一角にある書斎。制作以外の時間はここで過ごすことが多い。



せんじゅ・ひろし

1958年東京都生まれ。
87年東京藝術大学大学院博士課程修了。
95年第46回ヴェネツィア・ビエンナーレで東洋人として初めて絵画部門優秀賞を受賞。
2000年「両洋の眼・21世紀の絵画」展・河北倫明賞受賞。
02年第13回MOA美術館岡田茂吉賞絵画部門大賞受賞。
11年軽井沢千住博美術館を開館。
13年に大徳寺聚光院襖絵を完成。
近著に『日本画を描く悦び』、『芸術とは何か』など。



特集

身近な 対象から 主題を生む

「主題を生み出すこと」——
学習指導要領の「表現」で重視されているものの一つですが、
そのためには、指導計画に工夫が求められます。
今回の授業では、生徒たちが身近な植物の色や形という
[共通事項]に注目し、そこから主題を生み出していきます。
さて、先生はどのような工夫をして
授業を展開していくのでしょうか。

撮影 鈴木俊介

授業リポート

心を映す ボタニカル絵画を 描こう！

宇都宮大学教育学部附属中学校

高橋庸子先生

1年2組 (生徒数40名)

第1時

植物のイメージを
膨らませよう

初夏の日差しがさんさんとさし込む美術室。窓の外に目をやると、中庭にある木々の緑がまぶしい。

「さあ、今日からみんなには『ボタニカル絵画』を描いてもらおうと思います」。高橋先生は笑顔でそう切り出したが、「ボタニカル」という聞き慣れない言葉に、生徒たちはざわめき始める。

「ボタニカルは、植物という意味です。でもね、今回は単に植物をスケッチするわけではありません。どんなことをするかは後で説明します。では、まず教科書や資料集を見て、『なんか心に引っかかるなあ』と思う、植物の作品を探してみてください」。

先生がそう投げかけると、生徒たちは真剣なまなざしでページをめくり始め、植物がモチーフとなっている作品を探しだした。そして、ゴッ

ホやルノワールの作品、植物の素描などを挙げ、「色使いがきれいだと思った」「独特なタッチで描かれていて印象的」「葉っぱの形がおもしろい」などと発表。先生は、「色、描き方、形などが心に引っかったようですね」と言い、「色」「表現のしかた」「形」と板書。そして、「では、これから植物の写真を見てもらいます」と、モニターにオレンジ色の植物(右上写真)を映し出した。

「この植物からどんな印象を受けますか。自由に発表してください」。生徒たちは「とげとげしている」「南国にありそう」「赤とんぼのようで生きているみたい」などと発表した。「とげとげしている、南国にありそう、生きているみたいという意見が出ました。では、そのようなことから、この植物は『どんな人』だと想像しますか。ちょっとグループで話し合ってみてください」。

生徒たちは「ツンツンしていて、自分がきれいなのを自慢している感じだね」「炎のような色をしているから、情熱的な性格なんじゃない」

ストレチアという熱帯植物の画像を映し、「この植物は『どんな人』だろう」と投げかけた。

い」「自信家で強気な人だと思う」などと、さまざまな意見を出し合い、教室は一気ににぎやかになる。

先生は「では、次に見てもらう植物はこれです」と言い、紫色を帯びた葉がついたつるの長い植物を映した(下写真)。生徒たちは見た瞬間、「うわー！なんかあやしい」「暗いなあ」と盛り上がる。

そして、この植物についても、グループで話し合った。「目立たなくてあやしい感じ。でも内に秘めたパワーがあると思う」「つるがうねうねしているから、不安な気持ちをもっている」「最初は絶望的な印象を受けたけど、つるの部分がきれいだから、希望に手を伸ばそうとしてい



ハートカズラという植物の鉢を、書画カメラで映して、葉やつるなど、部分的に拡大して見せた。

るようにも見える」と、生徒たちの想像はどんどん膨らむ。

先生は「ちょっと葉っぱにも注目してみましょう」と言いながら、葉の部分大きく映し出した。「あっ！ハートの形になっている」と生徒たちが気づくと、「そう。実はこの植物の名前は『ハートカズラ』というんです。こうやって近くに寄って見たり、名前を知ったりすると、印象が変わりますね」と続けた。

次に先生は、グループに1台デジタルカメラを渡し、これから全員で中庭に出て、ボタニカル絵画の材料集めをすることを告げた。「植物の色や形、質感、においなどから、この植物はどんな性格だろうと考えて、スケッチブックにメモしましょう。気になった植物は、写真を撮ってきてくださいね」。先生がそう言い終わるやいなや、生徒たちは元気よく中庭へ飛び出していった。

葉っぱを触ったり、花に顔を近づ



けて香りを確かめたりする生徒や、一つの植物をじっくり見つめて動かない生徒。それぞれが自分なりの方法で、植物を観察して写真を撮り、スケッチブックに気づいたことをメモしていく。

そして、中庭から戻ってきた生徒たちに、先生は次のように話した。

「今日は、植物の写真や実物を見て、『どんな人なんだろう』と考えました。次の時間からは、植物に自分の気持ちを重ねて、ボタニカル絵画を描いてもらおうと思っています。



「わあ、この花きれい」。生徒たちは楽しそうに中庭の植物を観察する。触ったり、においを嗅いだりして気づいたことはスケッチブックにメモし、写真を撮る。

今撮ってきた写真でもいいし、家で資料を探してきてもいいし、『自分の気持ちを重ねてみたい』と思う植物を選んできてくださいね」。

指導計画

準備するもの

生徒 植物の資料、筆記具、色鉛筆、水彩絵の具、クレヨン
教師 ワークシート、デジタルカメラ、画用紙、ケント紙、マーメイド紙、黒い画用紙、書画カメラ、プロジェクター

学習目標

- 植物から感じ取ったことや想像したことを基に、主題を生み出すことができる。
- 主題を表現するために、形や色、構図などを工夫して作品を制作することができる。

評価規準

- 植物に自己を投影することに関心をもち、作品の主題を考え、作品制作に取り組んでいる。(美術への関心・意欲・態度)
- 植物から感じ取ったことや想像したことを基に、主題を生み出している。(発想や構想の能力)
- 主題を表現するために、画材の選択や、構図や配色などを工夫して制作している。(創造的な技能)
- 他者の発表を聞いて、作者の意図や表現の工夫を感じ取り、作品のよさを感じている。(鑑賞の能力)

授業展開 (全8時間) 生徒の活動

第1時 導入

植物の形や色などの特徴から、想像を膨らませる。

第2・3時 構想を練る

自分の気持ちを、植物を通してどう表現するか考える。

第4~6時 制作

自分の気持ちを表現するために、形や色、構図などを工夫してボタニカル絵画を描く。

第7・8時 発表・鑑賞

自分の制作した作品を紹介し、また他者の作品を鑑賞して、そのよさを味わう。

特集 身近な対象から主題を生む



第2・3時

構想を練ろう

「みんな、自分の気持ちを重ねる植物は決まりましたか?」。先生はそう投げかけ、ワークシートを配布。ワークシートには、「1. 描こうとしている植物の性格を考えてみよう」「2. この植物にどのような気持ちを重ねようと思いますか」という欄があり、生徒たちは記入していく。先生は、「植物に自分のどんな気持ちを重ねるか。ここがいちばん大事だよ」と強調する。

そして、「気持ちを表現するために、形・色・構図などをどう工夫すればよいか、みんなで考えてみましょう」と切り出した。

同じ花を、丸く描いた場合と三角形のようにとがらせて描いた場合を比較させたり、色や背景によって植物の印象がまったく違ってくことなどをスライドで見せたりしながら、表現の工夫について丁寧に説明していった。

その後、アイデアスケッチに入る。最初は、植物の写真をもっと見つめていた生徒も、徐々に自分のアイデアをスケッチブックに描き出していく。そして、先生は何名かのスケッチをモニターに映して紹介。「人に

右上／植物を通してどのような気持ちを表現するか考え、ワークシートにまとめる。
左上／アイデアスケッチ。どのような作品にするか、イメージをまとめていく。
右／「どう見える?」。生徒どうして作品を見合って、意見交換する場面も。
下／赤は情熱、青は冷静、黄は元気。「色で僕のいろんな気持ちを表そうと思います」。



よって、込めた思いや表現のしかたがさまざまでおもしろいですね。何度も言いますが、大事なのは『どんな気持ちを重ねるか』ということ。それによって、画材も変わってくると思います。そして、色鉛筆ではこんな表現ができる、絵の具はこんなトーンが出せる……など、具体例を見せて画材による表現の違いを説明した。

第4~6時

自分の気持ちを表現しよう

生徒たちは、色鉛筆、絵の具、クレヨンなど、思い思いの画材を持参し、早速、制作に取りかかる。

「先生、茎の部分をどう描くか、まだ迷っているんですけど……」「どんな気持ちを表したいの?」「ちょっとへこんでいる気持ち」「じゃあ、茎を少し曲げてみてもいいかもしれない」



先生は、たびたび制作途中の作品を紹介し、よいところを褒める。

先生は、質問する生徒に対して、「どんな気持ちを表現したいのか」を聞き取り、一人一人丁寧にアドバイスをしていく。

配色や背景の描き方など、生徒たちは、試行錯誤しながら制作を進める。「怒っている気持ちを表しているんだけど、伝わる?」「うーん、葉っぱをもっと濃い色にしたらどう?」などと、生徒どうしでアドバイスをし合う姿も見られる。

制作が佳境に入ると、友達の実作を見て感想を言い合うなど、自然と教室がにぎやかになっていく。

次時では、生徒たちが互いの作品を鑑賞し合う。





左／グループでの発表の様子。「なんでこの色なの？」など、質問が飛び交う。
右／友達の作品のよいところを付箋紙にまとめて、発表者へ渡す。

第7・8時

みんなの作品を鑑賞しよう

「今日はお互いの作品を鑑賞し合います。まず、自分の作品を振り返ってみましょう」。先生はそう切り出し、ワークシートを配布。ワークシートには「どのような気持ちを重ねて表現しましたか」「気持ちを表現するために工夫した点を書きましょう」などの項目があり、生徒たちは黙々と鉛筆を走らせる。

「これからグループごとに、お互いの作品を鑑賞します。作品を見せながら、どういう気持ちを込めたのか、どういう工夫をしたかを発表してください。発表を聞いた人は、付箋紙に感想を書きましょう。どんなところがよかったのか、なるべく詳しく書いて発表した人に渡してください」。

先生がそう告げると、生徒たちは4人グループになって、順に発表を始める。どのグループも「この色にはどういう意味があるの?」「背景に色を塗っていないのはなぜ?」など、発表者に次々と質問を投げかける様子が見られる。それぞれが自分なりに工夫して作品を描きあげているからこそ、友達の作品に対して疑

問や興味が湧くのだろう。

そしてグループでの発表が終わった後、グループごとに代表作品を一つ選び、前へ出て発表することに。

「1グループ4人ですから、それぞれ役割分担を決めます。①作品提供者……この人は作品を提供するだけです。②司会者……司会進行をしてください。③作品紹介者……作品提供者に代わって作品を紹介してください。④意見発表者……付箋紙に書かれたグループの意見を発表してください」。

あるグループは、Nさんの作品(下

写真)を選んで発表。Nさんは、「真っすぐな向上心と、周囲の人に気配りができる優しい気持ち」を、植物に重ねた。濃く描いた茎の部分は「芯の強さと向上心」を、茎を取り巻くふわふわとした丸い実は「優しい気持ち」を、緑の葉は「自分の周囲にいる人たち」を表現したそうだ。

発表が終わると、さまざまな質問が出され、終業を告げるチャイムが鳴っても、手を挙げる生徒がいる。

最後に、生徒たちから「細かいところにも工夫されていてすごい!」と、感嘆の声が上がり、大きな拍手が贈られた。Nさんたちは、ちょっとはにかみながら、ゆっくりとお辞儀をし、授業は笑顔で締めくくられた。



上／Nさんたちの発表の様子。
作品を指しながら、制作意図を説明。
下／Nさんの作品。

特集 身近な対象から主題を生む



植物に気持ちを重ねて

植物をさまざまな視点で観察し、想像を膨らませた生徒たち。
さて、どのような気持ちを植物に重ねて、作品を制作したのでしょうか。

Kさん



慎重な性格のKさん。

すごく悲しかったときに
励まされて
元気になった。
そのときの気持ちを、
赤いヘビイチゴに
重ねたい。



中庭で撮影したヘビイチゴの写真を見ながら、
どうすれば「明るい気持ち」が表現できるか、
何度もアイデアスケッチを重ねる。



ヘビイチゴを、柔らかい色で画面いっぱい
ふっくらと描いた。「泣きたかったけど、立ち
直って明るくなった気持ちを表現しました」。

S君



クラスのムードメーカー的存在のS君。

常に諦めず、
前向きでいたい。
茂みの中で輝いていた
白い花に、
その気持ちを
重ねようと思った。



白い花の輝きを強調するため、あえて黒い画
用紙を選んだ。中央に花を配置し、クレヨン
で力強く色を塗っていく。



花の周りにある緑のつるは絵の具を使って描
いた。「緑のつるは敵。黒い背景は闇を表
しています。その中で光る白い花が、僕です」。

Yさん



しっかり者のYさん。

私の中には、
明るい気持ちと
暗い気持ちが
同居している。
その両方の気持ちを、
植物の世界で表現したい。



自分の中にある明と暗の世界を対照的に表
現するため、画面を二つに区切ることにした。
中庭で撮った茂みの写真を参考にする。



右上を「明るい気持ち」とし、光に満ちた世
界を描いた。左下は「暗い気持ち」。鉛筆
だけで暗く仕上げ、対照的に描いた。



T君

ウツボカズラの写真を見て、自分の中の暗い気持ちや迷いの気持ちを表現したいと思いました。紫色を使ったり、背景に渦巻模様を描いたりしたのはそのためです。黄色の部分は、迷う中での「希望」を表現しています。



O君

何があってもすぐ立ち直る、明るく元気な気持ちを、ヒマワリに重ねて表現しました。背景をどうするか迷ったけど、明るい気持ちが外にはじけているように描きました。元気さを出すために、色は濃く塗るようにしました。



K君

中庭できれいなツツジを見て、「優しい気持ち」を重ねたいと思いました。僕が周囲の人を助け、それによって人が集まってくる様子を、花とチョウで表しました。ツツジを黄色にしたのは、「人が引きつけられる色」だと思ったからです。



Hさん

「気持ちが沈んでしまっても、決して希望を忘れない心」を表現しようと思いました。一人で暗い所を歩いていたら、その先には光に照らされた花があった——そんなストーリーを考え、作品にしました。



Yさん

白いユリの花に、自分の悲しい、寂しい気持ちを重ねたいと思いました。悲しみを表すために、黒い画用紙を使い、ユリを涙で濡らしました。最後に、画用紙を正方形に切り、ユリが引き立つようにトリミングしました。

授業を終えて

——植物から感じ取ったことを基に、主題を生み出す

今回の授業では、生徒一人一人が、「自分は何を表現したいのか」ということを、しっかり考えられるように、授業を組み立てました。

生徒たちの身近にある植物を題材に選び、植物から感じ取ったことや想像したことを基に主題を生み出せるよう、植物がテーマの作品を見たり、植物を実際に観察したりするなどして、導入を丁寧に行いました。

また、色や形、構図などを工夫して自分の気持ちを表現できるよう、同じ植物をいろいろなパターンで描いたものを見せ、比較させるなどしました。

授業の中では、技術的に多少未熟でもそれには目をつぶり、「どんな気持ちを表現したいのか」がいちばん大事であること、そして、そこから表現のしかたをどう工夫していくか考えるように、生徒たちに何度も投げかけるようにしました。

できあがった作品を見てみると、幼い印象のものもあります。しかし、発表を聞くと、彼らなりに、思いを込め、さまざまな工夫をしていることがわかりました。それぞれの作品がとても愛おしく思えます。(談)



高橋庸子
たかはし・ようこ

栃木県生まれ。
宇都宮大学教育学部附属中学校教諭。
北海道教育大学函館校卒業後、
栃木県内の公立中学校教諭を経て現職。

光村図書中学校『美術』の著作者である上野行一先生に、
今回の授業を参観していただきました。

授業を参観して



上野行一
うえの・こういち

大阪府生まれ。帝京科学大学教授。
大阪教育大学大学院修了。
広告デザイナー、公立学校教諭、
高知大学教育学部教授を経て2010年より現職。
著書に『私の中の自由な美術』(光村図書)など。
NHK 高校講座「芸術(美術Ⅰ)」の
番組の監修を務める。
光村図書中学校・高等学校
『美術』教科書の著作者。

この花は私です

植物をモチーフにして絵を描く授業は、先生方にもご経験があるのではないでしょうか。今回の特集で紹介した高橋先生の授業は、おそらく皆さんの授業観や題材観を逸脱したものだと思います。なにしろ植物を見せたかと思うと、「この植物はどんな人だと思いますか」と生徒に問いかけたのですから(※)。

しかも、次の時間には「植物に自分の気持ちを重ねて描きましょう」と課題を提示されました。よく見かける授業のように「花の色や形、柔らかななどの感じをよく観察しましょう」などと指示していません。「絵として収まりのよい構図を考えましょう」などと絵作りの工夫の指示もしていません。

先生の指導は、植物をモノとして、描く対象として捉えるのではなく、植物を植物として見ない見方を生徒に示すことでした。

先生が示されたのは、植物を客体化して他者として見る見方と、植物と自分を重ね自己同一化して見る見方です。

こう書くといかにも難しそうですが、私たちは日常、こうしたものの見方を自然に行っているのです。真っ赤なバラの花に情熱を感じたりす

るのはなぜでしょうか。散りゆく桜の花びらにももの哀れを感じたりするのはなぜでしょうか。植物を見ながらそこに心を投影している。植物に、あるときは他者を見て、あるときは自分を見ている。これは感性を働かせて見ていることの証でもあります。

色についても同じことがいえます。同じ色でも感性の働きによって、人それぞれに見え方は違ってきます。同じ青を見ても、青空を想起して「爽やか」と感じる人もいれば、青ざめた顔色を想起して「落ち込んでいる」と見る人もいる。色の見方には、自分の心理が反映されるのです。

元の色を変化させれば、イメージの違いはさらに広がります。高橋先生は第2時で、明快にそのことを示されました。IT機器を駆使し、スクリーンに投影された植物の画像の色を変えて見せ、色による見え方の違い、印象の違いが生じることを示されたのです。自分の気持ちを投影するには植物の色をどのように工夫すればよいかを、生徒に意識づけられた場面でした。

このような「学びのしかけ」に触発され、生徒は色や形が人に与える感情や心理に思いをはせながら、植物を描くことを通して自己を表現していったのです。

※MoMAのギャラリートークに同様のものがある。
『風神雷神はなぜ笑っているのか』
(上野行一著・光村図書出版)を参照されたい。

特集 身近な対象から
主題を生む



作家の肖像

第 6 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



1913-2005
丹下健三

たんげ・けんぞう

1913 年大阪府生まれ。建築家、東京大学教授。46 年東京帝国大学大学院修了。戦後日本を代表する建築家・都市計画家として国内外で多くの作品を残す。80 年に文化勲章、87 年に建築界のノーベル賞といわれるプリツカー賞を受賞。主な作品に、国立屋内総合競技場、東京カテドラル聖マリア大聖堂、東京都新庁舎など。ユーゴスラビアのスコピエ再建都市計画、イタリアのボローニャの都市計画なども手がける。91 歳で死去。

時代のうねりとともに

丹下健三は生涯で300 以上のプロジェクトに携わったといわれていますが、その中で私がいちばん好きなのは、やはり国立屋内総合競技場（現・国立代々木競技場）です。最初にこの建物を目にしたときは、その迫力に畏怖の念を抱き、心を震わせました。圧倒的な力で見える者に迫る、すばらしい建築だと思います。

東京オリンピックの時期は、敗戦後、復興して立ち上がろうと、世の中全体にエネルギーがみなぎっていました。この競技場は、そのエネルギーのうねりを見事に形にした建築だと思います。このような建築物は、後にも先にもありません。時代とハーモナイズした「奇跡」のような作品だと私は思っています。

建築家としての資質

彼の著書『丹下健三 一本の鉛筆から』には、国立屋内総合競技場を設計する際に予算が足りず、当時の大蔵大臣・田中角栄に直談判したというエピソードがつづられています。このように、丹下は、対話をし、物事をうまく調整しながら遂行していく強い力をもっていました。

建築家というのは、アーティストと違い、その時代の社会的な条件をしっかりと満たさないと、作品を実現させることができません。また、多くの技術者の力を借りながら、共同で作り上げていかなければなりません。さまざまなしがらみや矛盾の中で、自己表現をしていくのが建築家といってもいいでしょう。丹下は、建築の他に都市計画なども手がけ、数々の大事業に関わっていましたが、

どんなに大きな仕事でも、見事に調整をつけて、やり遂げていきました。建築家としての類いまれな資質をもった人だったのです。

「富士山」のような存在

丹下は対話をし調整する能力にたけていた、と述べましたが、それは設計の手法にも表れています。彼は、トップダウンではなく、スタッフ全員に案を出させて議論を交わし、そこから出たアイデアを設計に生かしていく方法をとっていました。その結果、彼の研究室や事務所は、磯崎新、黒川紀章など優秀な建築家を多数輩出しました。

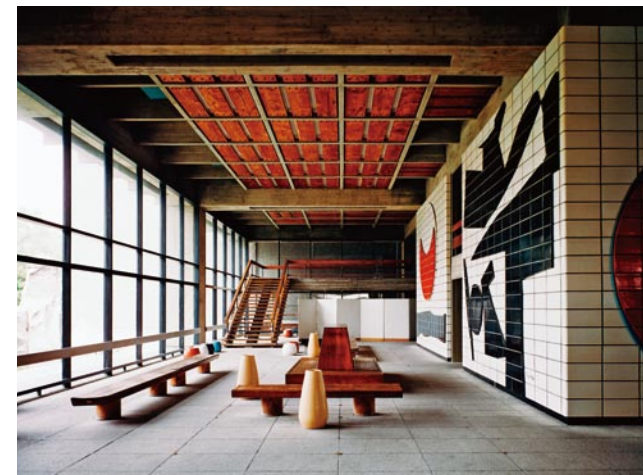
現在、日本の建築家は、世界でもトップクラスに位置していると思いますが、その礎を築いたのは、間違いなく丹下でしょう。彼は、日本の建築が世界から注目され、発展していく道筋をつくった、いわばパイオニアです。どの分野にも先駆者となる人はいますが、最初に世界に踏み出した人のもつエネルギーは、後世の人がどんなに努力してもなかなか超えることができないものです。

丹下は多くの建築家にとって「富士山」のような存在といえるかもしれませんが、決して超えることはできません。皆、彼に憧れて目ざすけれど、決して超えることはできない。だから、別の次元で勝負をし、世界へ出ていく——丹下が後世の建築家に与えた影響は計り知れません。これからも変わらず、偉大な存在であり続けることでしょう。（談）

酒井 忠康

さかい・ただやす

世田谷美術館館長、美術評論家。
1941 年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。



上／国立屋内総合競技場（現・国立代々木競技場） 外観 1964年
つり橋と同じように高いマストから屋根をつり上げる「つり構造」を採用。
それによりうねるような、芸術的な外観が生まれた。写真は第一体育館のスタンド部分。
（撮影：アフロ）

左下／国立屋内総合競技場（現・国立代々木競技場） 内観 1964年
第一体育館の内部写真。「つり構造」によって生まれた迫力のある大空間。
竣工当初はプールだったが、現在はバレーボールの試合などが行われる多目的競技場になっている。
（撮影：アフロ）

右下／香川県庁舎 1958年
日本の伝統的な建築様式を意識した設計。天井には垂木を思わせるコンクリートの小梁が見える。
ロビーには、画家・猪熊弦一郎の陶板画が設置され、丹下の建築と美しく調和している。
（撮影：新建築社写真部）

美術部へようこそ! 石川^の県^み能^ね美^あ市立根上中学校

根上中学校の美術部は、2011年より高速道路の遮音壁に絵を描くという活動を続けています。活動が始まってから今日までに、どのような経緯があったのか、お話を伺いました。

松林に出現する大きな絵

石川県・根上海岸に群生する美しい松林を抜けると、ダイナミックな壁画が現れる。能美市立根上中学校美術部の作品だ。海岸線を沿うように走る北陸自動車道の遮音壁に描かれた、縦3メートル、横12メートルの巨大な壁画。松、白山、北陸新幹線（2015年春開業）、能美市のキャラクター「のみまるくん」など、地元に関係したモチーフを組み合わせて画面が構成されている。

「この壁画制作をするようになって、4年目になります。地元の『いしかわ「能美の松原」サポートクラブ』から依頼を受け、高速道路を管理する中日本高速道路の協力を得ながら、制作しています」。そう話すのは、顧問の太田多門先生。

遮音壁を見渡すと、これまでの四つの壁画がずらりと並ぶ。年を経るごとに、作品に迫力が増し、並べて見てみると圧巻だ。

壁画制作を依頼した「いしかわ『能美の松原』サポートクラブ」の山本欽次さんは次のように語る。「普段、私たちは松林の保全活動を行っています。以前このあたりは雑草が生い茂り、状態がよくなかった。松を植樹したり手入れしたりするのはもちろんですが、地元の中学生に大きな絵を描いてもらって、ここを明るい場所にしたいと思いました」。

依頼当時、根上中学校の美術部員はたった5名しかいなかった。そのため、美術部以外からも有志を集めて壁画制作にあたったという。しかし、翌年から美術部への入部希望者がぐっと増え、現在の部員数は26名にのぼる。

夏休みを利用して壁画制作

壁画は、毎年7月末から約2週間かけて制作される。2階建ての足場になり、下絵から色塗りまで丁寧に仕上げていく。「足場の2階部分は高いので、落ちるのはと冷や冷やした」「1階で描いていると、上からペンキが落ちてきて、髪の毛がペンキだらけになってしまった」などと、部員たちが楽しいエピソードを教えてくれた。

「大変だったことは？」と尋ねると、3年生の部員が「今年は、先生に『松をしっかり描きなさい』と言われ、幹や葉の質感を出すのに苦労した」と答えた。毎年、壁画のモチーフには必ず松を入れている。今年は初心に返る意味でも、目の前にある松林をしっかり観察して松を描くよう指導したと、太田先生は話す。

山本さんは「松の保全のため、仲間とたびたびこの松林を訪れますが、この壁画があると、気持ちが晴れやかになります。これからも松を守る活動に励んでいきたい」と、壁画を見上げて笑顔で語った。



制作に必要な足場づくりやペンキの手配は、高速道路周辺の美化活動に力を入れている中日本高速道路が行う。学校・地域・企業の連携があって、この活動が実現している。

教室を飛びだして

金沢21世紀美術館 中学生まるびいアートスクール

金沢21世紀美術館（石川県金沢市）では、中学生を対象とした教育普及プログラムを行っています。



年、開館10周年を迎える金沢21世紀美術館は、オープン当初より「子どもたちとともに、成長する美術館」を旨とし、教育普及プログラムに力を入れている。

中学生を対象としたプログラムに、「中学生まるびいアートスクール」がある。市内の中学校の美術部員たちが、アーティストと一緒に作品をつくり、最終的に展覧会を開くというワークショップ形式のプログラムだ。講師として参加するアーティストは、椿昇さん（京都造形芸術大学教授）と、シロくま先生（同大学講師）。中学校教師の経験がある椿さんと、ユーモラスな風貌のシロくま先生に、中学生は徐々に心を開き、作品制作に打ち込んでいくという。

このプログラムは、今年で4年目。「考え方を考える」という大きなテーマを掲げ、ワークショップの内容は年ごとに変えている。「多感な時期にある中学生に、美術を通してさまざまな考え方や表現の

しかたがあることを知り、自分らしい視点を見つけていってほしい」。そう語るのは学芸課エデュケーターの木村健さん。市教委や現場教師、講師らと打ち合わせを重ね、生徒たちの将来の人生をどこかで支えるような活動となるよう考えている。これまでの活動は、年度ごとに1冊の本にまとめ、市内の中学校に配布されているそう。「学校の先生方にとっても、何かのヒントになれば」と木村さんは続ける。

今年度は「魔法のヒカリ」と題し、写真やジュエリーを題材にしたワークショップを行っている。現在、制作の真っただ中。どのような作品になるのか楽しみだ。



2013年度のワークショップの様子。「魔法のhome」と題し、「ホーム」という言葉からイメージを広げて作品を制作した。

放課後

第6回

A R T



第 6 回

「^ふ^{がく}富嶽三十六景 ^{おき}^{なみ}^{うら}神奈川沖浪裏」

^{かつしか}^{ほくさい}
葛飾北斎

錦絵（多色摺木版） 24×35.6cm 1830年頃
東京国立博物館蔵

Image:TNM Image Archives

絵画史上、最も動的な作品

北斎に興味をもったのは、もともと私がフェルメールの大ファンだったからである。フェルメールと北斎には百年以上の隔たりがあり画風も全然違う。どこにつながりがあるというのか。

それは「動き」ということである。私たちの生命と世界は動的だ。一瞬たりともとどまらず絶えず流転している。一方、絵はとまっている。画家たちは絵という本来的に静的な方法を使って、いかにして動的な世界をそこに表現するかを追求してきた。それが芸術の最大の目標であるといってもいいくらいだ。

フェルメールは、振り向き様の女性、ふと楽器の手をとめて窓の外を眺めみた瞬間、あるいはミルクを注ぐ姿の中に、そこにいたる時間とそこから始まる時間を封じこめることに成功した。それがフェルメールをフェルメールにした。

北斎もそのことに極めて自覚的だった。「神奈川沖浪裏」を見てみよう。北斎が描いた波はまるで生きているように見える。

北斎は生きていること＝生命の本質に気がついていた。生命は絶えず揺らぎつつ、変化と変奏を含んだ動的な平衡としてそこにある。生命は流れであり、エネルギーのうねりだ。

「神奈川沖浪裏」は、旋回するエネルギーが、その勢いを失うことなく、大きな波となってその極点に達した

まさにその瞬間、一瞬の静止の後、砕け散って次のうねりに手渡される様子を描ききった傑作である。それは、まさに生命のありようそのものである。

北斎は、生命の色である青を使って、生命の存在を描いてみせたのである。

フェルメールと北斎を結ぶ細い糸のもうひとつが青という色だ。フェルメールは鮮やかな青を表現するため稀少で高価な鉱物ラピスラズリを使った。

北斎はフェルメールの死後、登場した新しい青、「ペロ藍」にいち早く着目した。このきめの細かい顔料は水で溶くと薄くのぼしたり、^{にじ}滲ませることができた。これを使って北斎は、絵の中で青を動かすことに成功した。「神奈川沖浪裏」には、遠ざかる青、近づく青、連続する青、旋回する青が躍動している。

そこには、生命がもつ創造力、破壊力、あるいは^{よろこ}歓びや怒り、あらゆるエネルギーのうねりがこめられて、宇宙にまで届いている。青を動かすこと。生命の色を動的なものとして描くこと。フェルメールですらできなかったことを、北斎は成し得たといえる。あざやかな青を用いて、森羅万象の生命の輝きを描き続けた北斎は、絵師であり、哲学者であり、そして同時に科学者でもあったと思えるのだ。

福岡伸一
ふくおか・しんいち

生物学者、青山学院大学教授。
1959年東京都生まれ。京都大学卒業。
ベストセラー『生物と無生物のあいだ』（講談社現代新書）、
『動的平衡』（木楽舎）など、著書多数。
フェルメールに魅せられ、2011年に
『フェルメール 光の王国』（木楽舎）を上梓。
12年に美術館「フェルメール・センター銀座」をオープン、
館長を務める。13年には同館で
展覧会「あっぱれ北斎! 光の王国展」を開催した。